

# 研究班長総括報告

主任研究員 井上 駿 一 (千葉大学整形外科)

昭和53年度よりスタートした小児パラプレジア班は2年目をむかえた。病因として先天性異常の重要性が明らかにされ診断、治療に関する研究も成果が上りつつあるように思われる。昭和54年度班員の研究対照となったパラプレジア疾患は、345例と多数にわたり、Myelomeningocele, Meningocele 167例、Spinal cord tumor 131例、Neurofibromatosis 8例、外傷13例、Tethered cord syndrome 21例、脊髄炎4例、Spina bifida 80例、Hydrocephalus 13例、Down症候群に伴う麻痺2例、先天性奇形5例と様々な原疾患があり、現在なお小児パラプレジアの治療と対策に大きな問題のあることが明らかにされた。

病因に関する研究では、小野村らにより、引きつづきRatの催奇形実験により妊娠初期に多数の発生を認め、脊椎異常、下肢麻痺、変形につき詳細な観察結果が報告されている。また村地らは、Down症候群にともなう、環軸椎脱臼、Os Odontoideumの奇形により、生命予後に大きな影響のあるとの実態を示し注意をうながし、金田らは、北海道地区における小児パラプレジアの実態を調査し、脊髄々膜瘤によるものが57.3%と半数以上を占めることより、特に先天奇形の重要性を明らかにした。山口らは、脊髄腫瘍と各種のdysraphismにつき示し治療につき、早期診断と治療法につき述べた。井上、大塚らは、特に脊柱側彎症の神経学的異常所見より、診断、治療にmetrizamide myelographyおよびenhanced CTの有用性を述べcord anomalyがcongenital scoliosisに多いため手術的治療に際し注意を促した。また山下らは、新生児、乳児のSpina bifidaを中心に小児パラプレジアの診断に有用な、同じく水溶性造影剤metrizamideを用い、基本的手技、造影法を示した。また喜多村らは、小児水頭症におけるABF(脳幹反応)とblink reflexによりcortico spinal tractに対する脳室、脳皮質等の影響より診断の有用性を示した。

竹光、山内らは、本来麻痺の恐れがあり、またすでに存在する麻痺の増強を防ぐため、手術的治療によるパラプレジア発生予防の見地より各種の脊髄モニタリング法につき、動物実験、臨床経験より検討を加えた。

またパラプレジア児に対するリハビリテーションの立場より、陣内らは、早期社会復帰のためにも、早期治療の重要性を実例につき示し、同様に山根らは、パラプレジアによるpressure soreの発生は、リハビリテーションの障害となるため、体圧の分散による予防法が重要であると述べ、斉藤、高橋、渡辺らは、独特の下肢装具、車いす等の改善、改良を行い、個々のパラプレジアに対する、きめ細い指導が必要であると述べた。

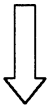
また高橋らは、排尿、排便機能につき調査し、早期よりの用手排尿訓練がよい結果をもたらすことを明らかにした。陣内らは、教育、社会復帰を考えた将来的治療の問題点をうきばりにした。

これらの研究成果をもとに、さらに昭和55年度の最終年度では、小児パラプレジアの病因のまとめと治療法および療育に関し班員の総括的提言が行われる予定である。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



昭和 53 年度よりスタートした小児パラプレジア班は 2 年目をむかえた。病因として先天性異常の重要性が明らかにされ診断、治療に関する研究も成果が上りつつあるように思われる。昭和 54 年度班員の研究対照となったパラプレジア疾患は、345 例と多数にわたり、Myelomeningocele, Meningocele 167 例、Spinal cord tumor 131 例、Neurofibromatosis 8 例、外傷 13 例、Tethered cord syndrome 21 例、脊髄炎 4 例、Spina bifida 80 例、Hydrocephalus 13 例、Down 症候群に伴う麻痺 2 例、先天性奇形 5 例と様々な原疾患があり、現在なお小児パラプレジアの治療と対策に大きな問題のあることが明らかにされた。